

輸血チーム医療体制の血液製剤および血漿分画製剤使用適正化に対する効果の検証

◎鳥居 知美¹⁾、清水 みゆき¹⁾、飯田 眞理¹⁾、伊藤 裕子¹⁾、川島 直樹²⁾、早野 友亮³⁾、高木 千晶⁴⁾、森本 剛史⁵⁾

大垣市民病院¹⁾、JA 岐阜県厚生連 西美濃厚生病院²⁾、JA 岐阜厚生連岐阜西濃医療センター 揖斐厚生病院³⁾、医療法人徳洲会 大垣徳洲会病院⁴⁾、社会医療法人 蘇西厚生会 松波総合病院⁵⁾

【はじめに】岐阜県合同輸血療法委員会では、県内の血液製剤の適正使用を推進するため、「血液製剤の適正使用に関する指標」として、「血液製剤の廃棄率」と「病院機能分類別血液製剤使用量 90%超使用施設数」を設定し活動を推進している。2018 年度の専門部会活動として、日本・輸血細胞治療学会により定められた「輸血チーム医療に関する指針」に基づく、プロジェクトとして、1) 輸血チーム医療体制のロールモデルおよび、2) 輸血チーム医療の医療機関連携のロールモデル確立を企画した。その活動内容のうち、プロジェクト 2) による輸血用血液製剤とアルブミンおよびグロブリン製剤における効果について報告する。

【対象と方法】岐阜県内の輸血最上位 30 位の経年的な医療機関輸血統計データから、I&A 認定のモデル病院として大垣市民病院、二次医療圏内より中規模病院連携モデル病院を選定し、3 病院に協力を得て実現した。

協力病院へ当院の輸血医療チームから輸血管理体制について支援的な助言を行い、輸血医療の適正化推進に協力し、規模・機能の異なる複数の医療機関における地域連携医療に輸血医療チームがどのように機能できるかを検証する。その指標として、連携前と連携後の赤血球製剤廃棄率とアルブミンおよびグロブリン製剤の使用量を比較検討した。

【結果】連携前（2017 年 8 月 1 日～11 月 30 日）と連携後（2018 年 8 月 1 日～11 月 30 日）の赤血球製剤廃棄率は A 病院（5.8%→0.7%）、B 病院（13.4%→0.6%）、C 病院（13.0%→17.3%）であった。アルブミン製剤使用量（g/月）は、A 病院（500.0→345.8）、

B 病院（453.1→204.2）、C 病院（381.3→331.3）、グロブリン製剤使用量は A 病院（0.0→0.0）、B 病院（0.0→8.3）、C 病院（20.0→5.0）であった。

【考察】赤血球製剤廃棄率は 2 施設で大幅に減少し、アルブミン製剤の使用量は 3 施設において減少しており、連携支援の効果があると考えられる。同等規模の施設間で比較検討することにより、病院として改善の必要性の認識、取組みへの姿勢の変化がみられた。視点を変えた助言により、新たな改善策の立案ができ、他施設との共同活動が改善を後押しする効果がみられた。輸血チーム医療の医療機関連携は使用適正化に有用であることが示唆された。引き続き活動を行い、更なる輸血医療の適正化に努めていきたい。
連絡先 0584-81-3341（内線 1171）